

歌川国貞の初期画業について
—豊国門下内での代筆問題に関連して—

兼松 藍子 早稲田大学

江戸時代後期～末期にかけて活躍した浮世絵師である歌川国貞(1786-1864)は、役者絵を得意とし、その名を広めた。国貞の画業を概略的に述べることは先学により度々行われてきたが、絵師の各時期における制作の傾向や、他の絵師との関連性等については未だ研究の余地があるといえる。よって本発表では、国貞画業の初期である文化年間の活動に注目し、国貞が如何にして人気絵師としての地位を築いていったのかを明らかにしたい。

国貞は初代歌川豊国に入門し、その後最有力の門弟として頭角を現していった。その経歴を他の豊国門下の絵師と比較すると、いくつかの特異な点が指摘できる。まず国貞は入門時期が14歳以前と遅くはないにも拘わらず、初筆の時期が文化4年(1807)と国貞が数えて22歳の頃であり、他の初代豊国門下の絵師と比べ遅く、約8年間も自らの作品を出すことのない修業期間であったということになる。また出版作品数の推移についても国貞の経歴の特殊性が見られ、国貞による読本挿絵の上限作品は文化5年の正月に出版されるのであるが、同時期に国貞は14作もの読本挿絵を手掛けている。この作品数は初代豊国門下としては突出した作品数であり、文化5年を境に急増したことがわかる。さらに錦絵についても、文化7年までの作品数は僅かであるのに対し、文化8年6月の芝居に取材した役者絵を契機として堰を切った様に多数の作品を出版するようになり、こういった作品数の急激な増加は注目すべき点である。

この様に国貞が短期間の内に飛躍的に作品数を伸ばした背景事情として、大手版元からの強い引立てがあったことが錦絵の版元印や肉筆画等の資料から確認される。しかし、いくら版元からの引立てがあったとしても、作品の制作経験が浅いはずである国貞が、急に大量の仕事を任されるようになったとは現実的には考え難い。この問題に対しては、国貞は師の代筆を行うことによって実践的な経験を積んでいたために、短期間のうちに多くの作品を出版するに至ったのではないかという指摘を提示する。浮世絵画派内における工房制作や代筆の実態については不明な部分が多いが、国貞が錦絵を多数刊行した時期である文化8年前後の初代豊国落款の役者絵を比較すると、同時期の作品間でありながら画風の揺れが確認される。このことから、豊国落款であっても他の絵師による作画が疑われ、国貞による代筆の可能性も生じる。そして実際に同時期の国貞と作品と代筆が疑われる作品とを比べると、両作品の画風には近似する点が見つかるのである。更には同じ時期において、国貞の画風に豊国が接近するという現象が見られることから、国貞による師への影響についての指摘も試みたい。

以上のように、国貞の画業初期を詳細に検討することにより、豊国一門の中での代筆や画風の影響関係に着目し、国貞が浮世絵師としての名声を得るに至った経緯と背景を示したい。

(かねまつ・あいこ)